

工房の入口に立つとブンと土の匂いが漂う。とても懐かしい感じのする匂いだ。アパートの物置きを改造したその工房に「秘密の隠れ家みたいでしょ」と山田さんはいたずらっぽく笑いながら招き入れてくれた。

年の修行の後、生まれ故郷の北海道での独立を決意。昭和六十一年に菊水で開窯した。「でも人脈も無ければ販路も無い。不安だらけのスタートでしたな」。だが、好景気と折からの陶芸ブームが彼女に味方した。順調に販路もでき、すぐに窯を続けるめども立つた。「ひたすら窯に向かい続ける毎日だったけど充実してましたね。これこそ私の求めていた道なんだって」と感慨深げに当時は振り返る。

「長く使っても飽きのこない作品が理想です」。緑色や灰色を基調に、鮮やかなオレンジ色をあしらった独特の色合いと都会的なデザイン。機能美と色合いの妙が彼女の作

2002.1

白石区民のページ page

白石区インターネットホームページ「ようこそバラの街へ」
<http://www.city.sapporo.jp/shiroishi/>
白石区民公式サイト「Shiroishi.org」
<http://www.shiroishi.org/>



今月の

人

山田 祥子さん (四五)

陶芸家、「工房祥吉」主宰

死ぬ間際まで窯の前に立っていた。そのころの私はどんな作品を焼いているかしら。

品の魅力だ。開窯して間もないころは、師事していた陶芸家の影響もあって伝統工芸的な作風のものが多かったという。「年を重ねることに作品の感じが変わってきたんです。でもそれがまた楽しい。何だか焼き物と一緒に成長しているみたいな気がしています」と彼女は笑う。だが、自らの作風を確立する苦労は、並大抵ではあるまい。幾度となく失敗を重ね、試行錯誤したさまは、何百冊ものノートに綴られた窯入れごとの詳細なメモが物語る。「変化を受け入れ、心任せを恐れない」。彼女が辿り着いた、あるがままの境地こそ彼女の作品の最大の魅力なのかもしれない。

編集 白石区役所総務企画課広聴係
☎003-8612
札幌市白石区本郷通3丁目北1-1
☎861-2400 内線224
FAX860-5236